

タチツボスミレ

Viola grypoceras

スミレ科



タチツボスミレ

名前の由来

ツボスミレに似ているが、より株立つことから由来する名前。「ツボ」は庭のことで、ツボスミレは庭に生えるスミレという意味。「スミレ」は花の形が大工の使う墨つぼに似ているということで、「墨入れ(スミイレ)」から変化した名前だと言われている。漢字名：立坪堇

形態的特徴

高さは15cmほどだが、花の後に20cm程度までのびる。葉は円に近いハート形だが、花の後にのびて長い三角形になるものが多い。花は淡紫色で径1.5~2.5cm。花には5枚の花びら(花弁)があり、上半分についている2枚を上弁、下半分についている花びら3枚のうち、左右の2枚を側弁、

真ん中の1枚を唇弁という。側弁の基部に毛が生えているか否かはスミレ類を見分けるポイントのひとつであるが、本種には生えていない。花の後背部の「距」と呼ばれる突き出た部分は、やや細長い円筒形で紫色を帯びる。

類似種と見分け方

オオタチツボスミレ、エゾノタチツボスミレ。

本種と類似種の3種はよく似ていおり、区別しにくいだが、花の後ろにつきてた「距」の長さや色、また側弁の基部に毛があるか否かで見分けることができる。タチツボスミレ

は距が長く紫色で、側弁の基部に毛はない。オオタチツボスミレは距が長く白色で、側弁の基部に毛はない。エゾノタチツボスミレは距が短く白色で、側弁の基部に毛が多く生える。



タチツボスミレ。側弁基部は無毛



エゾノタチツボスミレ。側弁基部は有毛



オオタチツボスミレ。側弁基部は無毛で、白く長い距が見える



タチツボスミレ。距は長く紫色



エゾノタチツボスミレ。距は白く短い

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期	■											
結実期		■										

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

生育環境・分布

落葉樹林内や林縁、草原などに普通に見られる。環境への適応の幅が広く、海岸草地から山地の林道わきまで生育している。

分布：国外分布は、朝鮮南部・中国中部・台湾。国内分布は、北海道から琉球まで。全国各地でもっとも普通に見られるスミレといえる。標高に対しても適応の幅が広く、本州中部では海岸から亜高山まで見られる。

北海道内では、北部にはあまり多くない。

十勝地方では、落葉樹林内や林縁、草原などに普通に見られる。針葉樹の植林地のような日差しが入りにくい暗い林床でも、少し日当たりがあるところでは生育している。し

ばしば群生する。



タチツボスミレは適応範囲が広い

生活史

開花時期：4～6月

開花までの年数：不明

寿命：多年草。

他生物との関わり

花には虫が訪れる。

タネの付着物（エライオソーム）はアリが好み、巣まで運ぶ。（→興味深い話の項参照）

ミドリヒョウモン、ウラギンスジヒョウモンなどのヒョウモンチョウ類の幼虫の食草となっている。



ミドリヒョウモン(裏)。タチツボスミレなどのスミレ類を幼虫時の食草とする
(標本-吉原利之氏所蔵)

興味深い話

■果実は熟すと風で揺れた拍子などで3片に勢いよく裂け、その裂開力によって中のタネをはじき飛ばし、タネをより遠くへ分散させている。

■スミレ類のタネにはアリが好む付着物(エライオソーム)がついており、それを目当てにアリがタネを巣まで運ぶ。アリは巣の中で付着物はずした後、タネそのものはゴミとして巣の外へ運び出す。このように、スミレ類は自力でタネをとばす他に、アリに運ばせることによってより遠くまでタネを分散させている。アリを使ってタネを分散させ

ている種はスミレ類のほか、カタクリやエンレイソウ類があげられる。



タチツボスミレ

配慮事項

生育している環境全体が大切である。

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
鳥類
ワシ・タカ

参考文献

「改訂版 牧野新日本植物圖鑑」牧野富太郎 北隆館 1989

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「日本の野生植物 草本II」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「日本山野草・樹木生態図鑑」沼田眞 全国農村教育協会 1990

「日本野生植物館」奥田重俊 小学館 1997

「山溪ハンディ図鑑6 日本のスミレ」いがりまさし 山と溪谷社 1996

「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994